

創造と独創を支えるもの

技術センター運営委員

大学院理学研究科 教授 圓山 裕



法人化に伴って発足した技術センターは、業務依頼・派遣システムの運用や研修会の開催、個人評価システムの試行などを経て、全学組織として教育と研究に寄与する仕組みが順調に機能して来ています。この間のセンター長をはじめ学術室と技術センター職員の皆様のご尽力に感謝申し上げます。技術センターから支援を頂いている者として、また運営委員の立場から、今後の技術センターに期待することを述べたいと思います。

私事になりますが、8年前に理学研究科に赴任して、特殊加工技術開発室の規模と技術職員の皆さんの高い技術力に大変驚きました。研究支援の要点は、製作された器具や装置が要求される機能を満たしながら、研究上の独創性をも担保することだと思います。従って、高い技術力が極めて重要です。中期目標で定員削減が語られる中であっても、是非とも技術センターの現在の規模と技術力を維持して行きたいものです。技術の研鑽と継承をお願いしたいと思います。

もうひとつ独創性を担保する仕組みとして、今から27年前にフランスの研究所で見聞した事が思い出されます。それは、テクニシャン(Technician)、エンジニア(Engineer)、サイエンティスト(Scientist)の役割分担と三者の連携による協働の実際です。若い留学生の私は見習いのSの扱いでしたが、ベテランのEは規律を重んじ厳しい中に多くの気配りをしてくれました。Tの役割は試料作りと装置開発とその改良を、Eは測定システムの構築とその運用を、そして、Sは研究目的と計画立案、実験とデータ解析、研究発表を担当していました。Sの創造性豊かな活動はEとTによって支えられていたと

欠だと言えます。従って、技術職員の皆
るはずです。

一方、我が国の大学はもとより研究機

Eの人口が極めて少ないために、Sが(E+T)の役割も果たす場合が多いのが実状です。大学では、更に、教員は教育と管理運営の役割も担うことになるので、研究と教育の両立は決して容易ではありません。また、科学技術創造立国を標榜する我が国で、若者の理工系離れの現状は深刻です。学生に科学技術の社会的意義を説明しながら、ものづくりの面白さを実感させる教育の機会は貴重です。大学の技術職員の役割の中で、技術の応用と成果の情報発信は重要だと思います。社会が求めている高度技術者(E)の役割について、学生達が考える機会を提供して頂けると有意義です。

研究活動を推進する体制としてSETの協働が望まれると同様に、教育についてもSETの連携が不可欠です。創造と独創を支えるものは、技術者と技術に裏打ちされた好奇心と熱意だと言えるかも知れません。これからの技術センターの役割は、今まで以上に広いと思われます。